

# 新しい発達診断法開発の試み

## —検査場面における「支え」について—

企画・司会：荒木 穂積（立命館大学産業社会学部）

話題提供者：竹内 謙彰（立命館大学産業社会学部）

松島 明日香（奈良教育大学教育学部）

富井 奈菜実（立命館大学大学院社会学研究科）

指定討論者：服部 敬子（京都府立大学公共政策学部）

荒木 穂積（立命館大学産業社会学部）

松元 佑（立命館大学大学院社会学研究科）

平沼 博将（大阪電気通信大学工学部人間科学研究センター）

【キーワード】： 幼児期前期、発達段階、発達診断、発達段階、「支え」

### 【企画の趣旨】

企画者らは、発達の質的転換期に着目した発達診断法のための「発達チェックリスト」（仮称）の開発を試みている。その一環として発達診断観察項目の検討や発達診断方法論の検討をおこなっている。従来の発達検査の多くは、発達評価を数量的に表現することおよびその評価の妥当性を高める必要から、できるだけ検査項目が等間隔に配置されるような工夫がなされてきた。開発を試みている発達検査は、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」（田中昌人 1987）に依拠している。

本検査法は、臨床観察法の手法を中心とした検査法で、熟達した心理専門家によって実施され、検査項目の通過傾向からえられるエビデンスと検査場面での子どもの行動観察からえられるエビデンスの両方に基づいてアセスメントされる。

本検査法では、方法論として「支え」をより積極的に導入し、そこでの子どもの反応を検査に組み込もうとしている。

本企画では、幼児期前半の時期（1歳半～4歳頃）を例に、検査における「支え」の諸問題について討論をおこないたい。

### 【話題提供】

■竹内謙彰「発達段階を捉える意義」

近年、自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）などの発達障害が注目されるようになってきたのに伴い、障害特性に応じた教育が強調されるようになってきた。ASDの特異な障害特性を理解することは、教育において重要である。しかし、障害特性は固定的なものではなく、それ自体発達の形成されてきたものであって、発達段階によってその現れも変わってくる。発達段階は複雑な構成概念であって簡単にその存在を実証できるものではないが、発達段階の視点を導入することで、子どもの全体的な把握に少しでも近づくことが期待される。

発達段階は、非連続性、順序性、領域普遍性という少なくとも3つの特徴を持つ概念である。障害がある場合、領域間の発達にズレが生じがちであり、領域普遍性は必ずしも担保されないものの、順序性と非連続性の観点から、対象となる子どもの発達上の位置が定まる。さらに、「階層一段階理論」では、発達の原動力を仮定するとともに、機能連関による発達の把握がなされている。障害児に対する発達アセスメントにおいて発達段階を捉える意義は、発達の質的転換期の視点から障害特性を含めたその子どもの全体的で動的な特徴を把握するための手がかりを得られるところにある。そのことにより、発達課題と連動した教育計画を策定していくことが可能になる。

■荒木穂積「発達診断における『支え』の意味」

きかくしゃ本検査法の開発過程で検討課題となってきたのが検査場面におけるテスターの「支え」の問題である。「支え」には、テスターによる課題遂行場面を子どもに観察させその後同じように行わせるもの（例前一例後）、検査中に紙などを置いて補助するもの、テスターがモデルを示し一緒にやるように促すもの、声かけや指さしにより注意喚起し課題の遂行を後押しするもの、課題遂行後に子どもの答えを再質問によってより確かな方向に向かうように枠づけるものなどが区別

できる。また、検査課題遂行後に、「いいよ」とか「がんばったね」など励まして検査へのモチベーションを高める声かけや励ましをあたえるものも「支え」といえるかもしれない。さらには「発達の抵抗」は時には妨害となるが広義の「支え」と見ることもできる。

これらの「支え」はこれまでの発達検査では、積極的な意義をあたえられてこなかったが、「支え」の意味をとらえ直し積極的に位置づけることが重要ではないかと考えている。

■松島明日香「発達診断における『支え』の実相（1）」

「支え」には、その子どもの現在の発達段階の特徴をより際立たせるためのものから次の発達段階の反応を引き出すものまで様々である。ここでは定量的な分析方法によって幼児期前期の子どもにとっての「支え」の質や意味についての検討してみる。具体的には、多重応答分析を用いて新版 K 式発達検査 2001 の下位項目と「支え」項目の固有値から布置図を作成し、各項目間の相互連関（共変動）を分析する。多重応答分析では布置図に配置された変数間の距離（近さ）によって、項目間の関連性や等質性を見出すことができる。これによって、導入した「支え」が発達段階の特徴を引き出すための効果を持ち得ているのか、さらに、認知面や言語側面など、どういった発達領域を支えるものなのかを検討していきたい。

■松元佑・富井奈菜実「発達診断における『支え』の実相（2）」  
発達診断をするうえで、「通過（+）」「不通過（-）」の評価だけでなく、「できた」を見ることは重要なことである。例えば、大小比較では正しく大きい丸を指差せない子どもに対して検査者が「お父さんみたいに大きいのはどっち？」と丸に意味付けをする（「支え」）ことで、子どもは大きい方の丸を指させることがある。このように「支え」を入れることで子どもは課題が出来るようになる。しかし、検査者の「支え」が妨害になる場合や検査者が意識していないことが「支え」になる場合もある。今回の報告では、検査場면을ビデオ分析し、検査者の「支え」の入れ方（言葉の声掛け、モデルの提示、評価など）が効果的な場合と効果的でない場合を明らかにしていき、課題遂行に「支え」がどのように影響を与えているのか、検査場面における「支え」の効果について検討する。

### 【総合討論】

2名の指定討論者からコメントいただき、発達診断法における「支え」の意義と発達診断のための「発達チェックリスト」開発の課題についての議論を深めるきっかけとしたい。

付記：本研究は、JICA 草の根技術協力事業「知的障害児の就学率向上につながる教育プログラム開発とその普及を支援するプロジェクト」（プロジェクトマネージャー：荒木穂積）（2008年8月～2013年8月）および私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究』（伴走的支援チーム）（2013年4月より現在）の支援を受けてすすめられている。

（あらかきほづみ、たけうちよしあき、まつしまあすか、まつもとゆう、とみいななみ、はっとりけいこ、ひらぬまひろまさ）